

福江 今朝ね、お新香切つてたら、包丁が重たくて弱った。包丁、もっと軽いのにしないと、これからはお新香も切れないよ。昨日できたことが、今日はもうできない。この先も、どんどんできなくなるだけだ。そういう不幸も抱えてんだよ。

昭夫、箱から佃煮の壺を数個取り出し、卓袱台に並べる。

福江 この壺の蓋だつて、きつともう開けられないよ。やってみようか。(と、一つ取り)これが何の佃煮だかも、もう見えないんだ。書いてあることも読めないし。そんなことはとつくとのおだから、今驚くのシャクだけ……(と、あけようと)ほら、あかない。何年たつたつてあけられないよ。お前がいるから、奇跡的に食べることになるんだろけれど、本当はもうこんなモン、自分一人じゃ食べられないんだ。

昭夫 (受け取つて、あけ) それは、やがては僕にも訪れる不幸なんだから、自慢されても困りますよ。もっと母さんに特有の不幸を語りなさいよ。

福江 特有のなんぞなんて気取つた言い方して、お前のそういうとこ大っ嫌いだよ。

昭夫 他には、不幸は？

福江 走れないよ、もう母さん。

昭夫 他には？

福江 何だい。全部言わせて、全部たいしたことないつて言う気かい。

昭夫 小出しにされるとたまらないから、この際、全部言っちゃいなさいよ。

福江 母さんが恐いのは、いつ死ぬかつてことじゃない。いつ歩けなくなつて、いつ寝たきりになる

かつてことさ。何もかも人のお世話になるのは、どんなに情けないだろうねえ。そういうことの起きる日が、すぐそこまで来てるのに、まだ大丈夫、まだ大丈夫つて、騙し騙し希望をつないでる。今ね、その希望をつなぐ材料を、いきなりもぎ取られちゃったんだ。年取つて希望をなくすようになるから、今の母さんをよく見とくがいい。(と、泣き出す)

昭夫 見えますよ、やだなあとありますよ。子供にこういう姿を見せる親にだけはなりたくないつて、そう思うよ。

福江 (まだ泣きながら) 見てなよ、母さん立ち直つてみせるから。あそこでまた元気に体操して、笑顔をいっぱい振りまいてね。たださ、簡単に立ち直つたと思われちゃ困るから、たいしたことなかったつて思われたくないからね。どんなに苦しんでるかを見せとくんた。ここから立ち直つた母さんを思い出せば、いつか昭夫の役に立つ。

昭夫 ほら、食えよ。うまそうだぞ。

福江 木部も奮発したもんだね。こないだはそこらのお惣菜だったのに……(と、箸をつける)

昭夫 そいじゃあね、俺の不幸を聞いてもらおうか。

福江 おや、張り合おうつての？ 離婚かい？

昭夫 平気そうに言うなよ……

福江 平気じゃないけど、母さんの不幸と張り合うからには……

昭夫 一つはそれだよ。でも、もう一つある。

福江 何だい、得意そうに……

昭夫 一昨日、退職を勧められた。退職を勧めていたこの俺がさ。今日の休日出勤は、その身辺整理だよ。

福江 ……

昭夫 (箸で塩を叩き) コイツのせいだ、この佃煮野郎の。コイツへの対応が悪かったとよ。

福江 どうするのよ、それ……

昭夫 退職するよ。離婚もする。両方いつぺんに来たよ。なかなか不幸だろ？

福江 ……

昭夫 どうだい、見方によっちゃあ、俺の方が勝ってるって氣いしない？ 母さんが俺の歳とき、ここまで不幸だったかね？

福江 お前はどこまで阿呆なんだい。今の話で私の不幸はまた倍増されましたよ。やつぱり母さんが勝ってるじゃないか。もうお箸も持てないよ…… (と、酒を飲もうとする)

昭夫 そのコップ、箸より重いと思うけどなあ……

福江 二つの不幸の、どっちか何とかしなさいよ！ 二ついつぺんてのが氣に入らないよ！

昭夫 どうにもならないよ、二つとも……

福江 佃煮野郎をちよつとは見習ったらどうなのよ！ 何で受け入れるのよ、おとなしく！ あがきなさい！ 騒ぎなさい！

昭夫 喜んでよ。俺の仕事、嫌いだっただじゃない。もう人の首切らなくてすむんだよ。新しい職場も用意してくれた。退職金の上乗せもある。

福江 それでシャレてるつもりかい？ そういう台詞を暗記するほど言われて、今度は言われて、はい、そうですかとは……

昭夫 新しい仕事、どっかの倉庫の主任だつてよ。楽なんだつて、ブラブラしてりゃあいいそうだ。(ニコニコして) 知美もね、こないだ会社に来て、何が何でも別れたいつて。好きな男でもできた

んじやないかなあ……

福江 どっちかを何とかしなさい！

昭夫 やあだ。両方受け入れて、うんと不幸になるんだもん。

福江、ヨロヨロと立ち上がり、机の方へ。電話をかけようとする。

昭夫 知美いないよ。レストランで何かやってんですよ、お仕事。

福江 どうしてほつといたのよ、こんなになるまで！

昭夫 ほつといたわけじゃない。関係を改善しようと、努力しましたよ。

福江 知美さん、いつだっけか、うちに一人で来たことあったわよ……

昭夫 いつ……

福江 三、四年前かな？ お父さんはもういなかった。びっくりしたわよ、電話もしないで、いきなりそこ(庭)に立ってるんだもの。お母さんの顔、見に来たなんて笑ってね。しばらくどうでもいいこと話してただけで、そのうち、お前のアルバムが見たいって言い出した……

昭夫 見せたの？

福江 うん……

昭夫 やめろよお！

福江 どうやってやめんのよ今から。そのとき私、思ったわよ。昭夫は女房に小さいときの写真も見せてないんだつて。そりゃそうだよね、うちに連れてきたの、数えるほどで……

昭夫 親父がそういうの苦手だったろ。いつだつて、ニコリともしないで……

福江 知美さん、お前の写真見てずいぶん笑ったよ。半ズボンで両膝にアカチン塗って、ベソかいてるとこなんか、泣くところという顔になるのかなんて笑った。お前の泣いた顔見るの、初めてだったね……

昭夫 あれ見たのかよお、知美……

福江 あの写真にも笑った。お前がラッパみたいなの、つぎはぎのGパンはいて、長い網みみたいなチヨッキ着てさ……

昭夫 あれも見せたの！

福江 これには一番笑ったよ。大学の一年頃かね。髪の毛伸ばして、オバサンみたいなパーマかけてんだもの。二人で笑ったこと笑ったこと……

昭夫 知美は何しに来たんだよお……

福江 だから、母さんの顔見に来たって言うから、そう思ったのよ。でもあれ、お前の顔を見に来たんだね。見たことのないお前の顔をさ……

昭夫 ……

福江 ねえ、電話してごらんよ。レストランでもいいから。糸がこんがらがったのは、そう前じゃないよ。まだほどけるかもしれないよ。

昭夫 もうOKしちゃったもん。判を捺したよ、離婚届けに。

福江 お前、顔色も変えずに捺したんだろ？

昭夫 どうだかね。逆さまに捺しちゃ悪いだろとか、そんなこと考えたけどね。

福江 うんとうろたえて、逆さまに捺すぐらいのことはしなくっちゃ……

昭夫 うまいんだよ、判子捺すの！ 突然下手になんかなれねえよ。

福江 じゃ、これでサヨナラかい？

昭夫 まだ顔は合すだろ。残務処理とかいろいろあるから……

福江 残務処理だなんて、夫婦のことを。きつとあれだね、残務処理のときだって、お前は平気な顔して、テキパキ事を運ぶんだらうね……

昭夫 グジグジしたら、情が深いっての？ 逆でしょうが。新しいスタートを切ろうって人にさ……
福江 どこまでも本心を隠すんだね。小学校の頃は、本心を言い過ぎて困る子だったのに。自分でパンツを洗うようになったら、何もかも隠しっぱなしだ……

昭夫 やめろよお、人の人生遡んの！

福江 だって、小っちゃいときのお前は可愛い子だったよ。マブちゃんがテツちゃんの算盤隠したとき、そんなことしちやいけないってはっきり言ったよ。

昭夫 マブちゃん？ そんな子、知らねえぞ……

福江 マブちゃんだよ、小学生なのに、相撲取りみたいに大きな子でさ……

昭夫 いねえよ、マブちゃんなんて。作るなよお……

福江 いたわよ、マブちゃん。どこの子か忘れちゃったけど、その大きいマブちゃんにさ、テツちゃんの算盤を出せてお前は迫ったんだ。そこの縁側のすぐそばで、こっちに背中向けてたけど、足がブルブル震えててね……

昭夫 マブちゃんの？

福江 お前の足だよ。母さん、出て行こうかと思ったけど、アイロン持ったままこらえてた。お前、一歩も引かなかったよ。いい男だって惚れ惚れした。この調子でいくのかと思ったら、そうはいかないもんなのねえ……

昭夫 ……

福江 あのと、ちゃんと褒めてやりやよかった。母さん、何だか照れちゃって、おかずにメンチカツつけたぐらいで済ませちゃったけど、ああいうことは褒めなきゃねえ。褒めときゃ、今頃、こんな意地悪なオッサンになんか……直ちゃんの眼鏡をゴミ箱に捨てたりして。どうしてあんな子供じみた真似ができたもんか……（と、また泣き出す）

昭夫 直ちゃんね、文彦のレコードを取り上げて捨てたんだ。ビートルズのドーナツ盤をゴミのうに捨てたんだよ。直ちゃんばかり立派に言うなよ。

福江 直ちゃんは悔やんでましたよ。お前の落書見るたびに心が痛むってそう言ってた……

昭夫 それを文彦には言ったのかねえ。言っていないから、ここ来て悔やんでたんじゃないの？ 謝った話、聞いたことある？ 謝ったら文彦がどう言ったとか、そういう話が出てもいいだろ。謝らないよ、直ちゃんは。今さらみつともなくて蒸し返せなかったんだ。謝れないから出てくるような関係になっちゃったんだよ！

福江 そうかしら。直ちゃん、謝りそうだけど……

昭夫 謝ってないよ！ 足袋作りながらビートルズ聞いてた父さんとおんなじだ！ 便所の落書ぐらいで、あんなに子供を殴っておいて……

福江 父さん、あれが教育だと思つたのよ。ヨソ様行つて落書したら大変だって。でも、ずっとあのこと引きずってたよ。壁を塗り替えようって話になったとき、あれを残したのは父さんなんだから。父さん、謝らなかったかもしれないけど、あれを残して謝ったんだよ。

昭夫 母さん、父さんを止めてくれたよね。謝んなさい、謝んなさいって、俺に向かつて叫びながら。でも、俺はなかなか謝れなかった。だって、母さんがあの絵を褒めてくれたから。母さんはあの絵

を見つけたとき、うまいじゃないかって褒めてくれた。だから俺は、母さんが父さんの前でも褒めてくれるかって、父さんが帰るの楽しみにしてたんだ。でも、父さんがあの絵を見て怒り出したら、自分が褒めたことなんかおくびにも出さないで、ただ父さんに謝れの一点張りだよ。俺が、なかなか謝れなかったのは、母さんの豹変ぶりに驚いたからだ。あの夜家出したんだって、父さんが恐かったからじゃない。母さんが信じられなくなったんだよ。肝心なときに味方になってくれないって、あのと、俺はつきりわかったからだよ！

間。

福江 私は最初、褒めたんだっけ……

昭夫 ほら、忘れてる。もういいよ。

福江 褒めたような気もしてきた。私のやりそうなことだもんね……

昭夫 いいよ、もう、話のついでに出ただけだ……

福江 褒めたね、どうも。だとしたら、ひどいね……

昭夫 もういいったら……

電話が鳴る。

福江 山岸のおばあちゃんだ。私は死んだって言ってよ。

昭夫 自分で言えよ。